

藤村「処女地」の執筆者

——補遺、素川絹子——

永 淵 朋 枝

序

島崎藤村が創刊した婦人雑誌「処女地」(大11「一九二三」・4
大12「一九二三」・1)に執筆したのはどのような女性達だったのか。「処女地」は婦人雑誌の中でも女性のみが執筆したという特徴をもつ⁽¹⁾。執筆者を明らかにすることは、「処女地」の特徴を明らかにすることになるであろう。また、藤村の雑誌に集まった女性という枠はあるが、大正時代に文章を書こうとした女性達がどのような人であったのかを知ることでもできるであろう。

拙論「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達・目録」文学事典等に項目のある一名の女性作家についての「藤村『処女地』に執筆した女性作家達(一)(二)(三)」「神女大國文」平19・3、20・3、21・3、22・3によって、「処女地」執筆者の略歴や「処女地」以外での執筆状況等を明らかにした。本稿ではまず、それらの補遺を掲げ、次に「処女地」の編集実務を担当した

素川絹子についての調査をまとめる。さらに創刊当時の執筆者の年齢、未婚既婚の別、学歴を見ることによって「処女地」執筆者の全体像を捉える。

一、補遺

(一)「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達・目録」補遺

伊東英子

内外時論

8・11 大8・11

「行手は暗し」⁽²⁾

少女倶楽部

1・1

大12・1 「絵と語る少女」(童話。初山滋画)

少女倶楽部

1・5 大12・5

「桃色の塔の王女」(童話。初山滋画。写真入)

画。写真入)

*東京朝日新聞

大12・10・17朝

「学芸たより」⁽³⁾ 消息 伊東英子氏

赤坂台町六十五佐々木方に転居せしが数日中に大阪に赴く

少女倶楽部 1・11 大12・11 「夏のおもひで」(童話。初山滋画) 随筆 2・6 大13・7 生田花世・佐佐木信綱など「現代の文芸、作家、及び、作品に対して」(回答)

今井喜美子

「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達・目録(前出)で」「同一人物と確定できていない」と記したスキーヤー今井喜美子は別人であることがわかった。スキーヤー今井喜美子「わが家の野鳥記」(「アルプ」昭43・3)に同級とある佐伯敏子が明治39年生まれ(「庭にくる鳥」小峰書店 昭50・11による)、「処女地」の喜美子は明治33年生まれだからである。

大井さち子

東京朝日新聞 大11・10・26朝 「かき蛸」(詩)「かき蛸」はペンだこのこと
東京朝日新聞 大11・11・1朝 「夕べ」(詩)
東京朝日新聞 大12・1・14朝 「色」(詩)
東京朝日新聞 大12・8・17朝 「夕べ」(詩)
東京朝日新聞 大12・12・24朝 「措愁」(詩)
女人芸術 2・2 昭4・2 「男性訪客(座談会)」、生田花世・林芙美子など(「深尾須磨子訳」『紫の恋』合評)
女人芸術 3・7 昭5・7 葉山嘉樹・井伏鱒二・鷹野つぎ・若杉鳥子など「芳箋(女人芸術に関する批評・意見)」

婦人公論 16・1 昭6・1 浅原六朗・近松秋江・三宅やす子など「ヒステリー座談会」

*文学時代 3・1 昭6・1 檜崎勤(「美人礼讃」マダム・大井さち子)(写真入)——さち子夫人はからだは繊細で華奢であり過ぎるが、ラテン的な明朗と聡明を持つ。

婦人公論 16・6 昭6・6 「足を踏む男」

織田やす子(織田やす)

女子青年界 18・9 大10・9 「生涯の意義と目的」神戸女子神

学校 織田やす子

女子青年界 22・3 大14・3 織田やす「若き姉妹達に」

女子青年界 22・11 大14・11 「総会印象記」神戸女子神学校

教授 織田やす

女子青年界 23・7 大15・7 織田やす「共同の精神」

女子青年界 24・1 昭2・1 織田やす「生命の味」

河井稲子 島本久恵『長流 八』(みすず書房 昭37・3)に、

藤村が友人河井醉茗に「処女地」メンバーの推薦を頼み、稲子が参加することになったこと、醉茗の次女、三女を死なせた結核に長女稲子も罹り、一家で転地する(大11・7)ことが書かれている。「処女地」8号「読者へ」に「静養中」とある。「春(婦女界)」は、高等女学校教科書(以下、「教科書」と記載)『新編女子国文』(修文館書店 藤井乙男・春日政治編 大15・8 初版・大15・12

訂正再版)に採録⁽⁴⁾

現代文芸 12 大14・4 「小品二題 新進二家」春
詩神 2 2 大15・2 「一つの灯 ―Yにおくる」
婦女界 33 6 大15・6 「女流小品集」春
婦人公論 12 1 昭2・1 「あるじ」(詩)
若草 4 10 昭3・10 「十月号」秋の歌(歌)
婦女界 39 2 昭4・2 「病む者」(小品)

田尻稲子 海軍中佐の娘。手足が不自由であった。「風に吹か

れる草」(「処女地」7号)は教科書『現代女子国語読本』(東京
開成館 八波則吉編 大13・大14・2訂正再版)、『最新女子国文』

(宝文館 松村武雄編 昭2・昭3・1訂正再版)に採録。

女性時代 3 11 昭7・11 「特輯 顔を主とした私の自画像」

女性時代 4 7 昭8・7 「口絵 社友近影、田尻稲子」(「新

しき青草」

*女性時代 5 8 昭9・8 河井醉茗『女性時代』の人たち

——田尻稲子は誰よりも個性がはつきりしていて、最近の躍進ぶりも目覚ましい。

*女性時代 12 4 昭16・4 河井醉茗(『女性時代』の詩)(二)

田尻稲子——独自に創造してゆく才能と技量をもつ。

女性時代 12 11 昭16・11 「詩の十年」(随筆)——「女性

時代」入社(昭6・9)から十年、「苦しい苦しい思ひを重ねて、

詩に逃れよう」と詩を書いてきた。

女性時代 13 6 昭17・6 昭18・2・4、6

「鏡影(一)」「(一一)」手足が不自由で、祖父母の家から、お

ぶわれたり馬車に乗ったりして通学した、女学校時代までの追憶。

女性時代 14 4 昭18・4 「女性時代の思ひ出(一)」

女性時代 14 10 昭18・10 「飯倉の先生——島崎藤村氏を憶

ふ」

塔影 155 昭41・1 (河井醉茗追悼)「追想」——「処

女地」がなくなつてから「女性時代」へ行つてみたらどうかと藤

村先生にすすめられた。

塔影 175 昭48・7 「島崎静子さんのこと」——追悼文

長坂きくじ

大正七年結婚、昭和五年教員退職後は農耕に従事。「友に」(「処

女地」1号)は、『現代婦人の手紙』(河井醉茗編 アルス 大13・

4)に収録 教科書『新編女子国文』(修文館書店 藤井乙男・

春日政治編 大15・8初・大15・12訂正再版)に採録。

塩原久和代 本名桑喜代。米国大使塩原正直の妹。幼時に父死

去。早くに夫と死別し、その後洋画を学ぶ。女流洋画家初の二科

会会友である久和代の「処女地」参加は、藤村の友人で二科会結

成の中心人物、有馬生馬の仲立ちによると考えられる。鷹野つぎ

『悲しき配分』等の装幀者でもある。「竹林昼飯」(「週刊朝日」)

は教科書『国文 女学校用(富山房 富山房編輯部編 大14・10)に、「星祭の頃」は『国文 女学校用(富山房 富山房編輯部編 大14・10)に、「魂祭の頃」は『女子新国文 改制新版(富山房 芳賀矢一編・橋本進吉訂補 昭7・昭12・6訂正五版)に採録。『明治大正文学美術人名辞書(松本龍之助編 立川文明堂 大15・4)、『昭和大典記念 日本婦徳の鑑』(東京婦人新聞社編・刊 昭6・12。『日本女性人名資料事典 第1巻』日本図書センター 平18・3所収)に項目あり。昭11・9・15没。

*女の世界 26 大5・5・10 「大正婦人録」

婦人評論 318 大3・9 埴原桑喜代女史筆「林檎と櫻」(口絵)

中央美術 410 大7・10 「少女(二科会)」(画)⁽⁵⁾

東京朝日新聞 大8・9・1朝 「早い出世の埴原外務次官 今あるは母堂の力 閨秀画家の令妹久和代さん 兄妹が生立のおもひ出話」(談話)

東京朝日新聞 大9・9・4朝 「扇を持てる(二科出品) 埴原久和代女史」(画)

美術写真画報 19 大9・10 「扇をもてる(二科展)」(画)

みづゑ 189 大9・11(帝展号) 「所感」

中央美術 73 大10・3 「日記から」

*東京朝日新聞 大10・7・5朝 「学芸たより」 埴原久和代氏花の画展観 銀座三丁目二ツポン楼上にて六日より十日まで昼夜開催

*中央美術 78 大10・8 「『展覧会月評』 埴原久和代習作展観」

みづゑ 200 大10・10(二科展覧会号) 「支那服を着たる女(二科会出品・油絵)」(画)

みづゑ 201 大10・11(帝展号) 「軽い印象」

東京朝日新聞 大11・2・25朝 「『学芸界の人々』 好い画室さへあつたら」

婦人之友 168 大11・8 「あなたはどんな手芸をなさつておいでになりますか」(回答)

みづゑ 212 大11・10(二科展覧会号) 「女の胸像」(画)

みづゑ 213 大11・11(帝展号) 「帝展初めの日の感想」

中央美術 98 大12・8 「思出す事ども」

みづゑ 225 大12・11(革新美術号) 「九月の一日のことと今後の画描」

婦人之友 184 大13・4 「『現代婦人風俗批判』 現代の婦人の風俗について」

東京朝日新聞 大13・5・23朝 「『最近の感想』 初夏の夜」

女性改造 36 大13・6 「『一番嬉しかった友情の思ひ出』 身にあまる犠牲」

みづゑ 233 大13・7(近代美術とその作家) 「芍薬」(画)

みづゑ 233 大13・7(近代美術とその作家) 「『夏の写生地の想ひ出』 故郷の夏(上)」

中央美術 107 大13・7 「アトリエ日記」(木下義謙筆「埴

原女史「スケッチ人」

東京朝日新聞 大13・7・9朝 「学芸」『先覚』——戸川秋
骨訳メレジコフスキー『先覚』なども読む。

みづゑ 234 大13・8 「夏の写生地の想ひ出(下)故郷の夏(下)」

アトリエ 1 8 大13・10 「椅子による(二科出品)」(画)

婦人之友 18 10 大13・10 「顔」顔の興味

アトリエ 2 2 大14・2 「日記の一節」

アトリエ 2 4 大14・4 「春展寸感」(春陽会展覧会の感想回答)

婦人之友 19 4 大14・4 「生涯をあげて画の世界へ」——

夫と死別。

婦人之友 19 7 大14・7 「美しき印象を遺した人々」松井須磨子のモンナ・ブナ

*東京朝日新聞 大14・9・15朝 羽太鋭治「(一点一評)かの子の肖像」——着物のひだにも生の躍動と力が波うち、二科会中の傑作。

アトリエ 2 10 大14・10 「かの子の像(二科)」(岡本かの子の肖像画)

子の肖像画)

中央美術 11 10 大14・10 「かの子の像(二科会出品)」(画)

婦人公論 11 7 大15・7 「婦人の一生(以下三篇を特に

独身生活者の記録として)」(一)気楽さ煩しさ

少女倶楽部 4 7 大15・7 「閨秀画家の少女時代」雪の日

の思ひ出(写真入)

婦人 3 7 大15・7・10 「少女」(画 太子展出品)

若草 2 10 大15・10 「支那服の女」(画)

中央美術 12 10 大15・10 「支那服(二科)」(画)

アトリエ 3 10 大15・10 「支那服(二科)」(画)

美之国 2 10 大15・10 「二科展之部」支那服」(画)

美術新論 1 2 大15・12 「帰郷日記の中から」

アトリエ 4 1 昭2・1 「私の画学生時代」今も画学生です——結婚し、その後独身すべく決心してから生涯の仕事として洋画を選び、習いだした。

令女界 6 4 昭2・4 「少女」(画)

美術新論 2 7 昭2・7 「供養言」川上涼花さんの追憶

アトリエ 4 8 昭2・9 「山下新太郎論」尊敬する山下さん

美術新論 2 10 昭2・10 「支那服の女(二科展)」(画)

アトリエ 4 9 昭2・10 「支那服(二科)」支那服の女(二科展)」(画)

科展)」(画)

美之国 3 8 昭2・10 「支那服の女(二科)」(画)

令女界 6 11 昭2・11 「支那服の女・ある令嬢」(口絵)

中央美術 14 9 昭3・9 「回顧誌上展覧会」少女」(画)

中央美術 15 5 昭4・5 「五月礼讃」五月のある日

若草 5 10 昭4・10 「二科・院展・青龍社美術展集

はばたんといち」(二科展)」(画)

みづゑ 296 昭4・10 「秋を待つ」

アトリエ 6 10 昭4・10 「有島生馬論」 殿様

女人芸術 3 3 昭5・3 「題画」(画)

婦人サロン 3 4 昭6・4 埴原くわ代 「私の女学校卒業前

後」あの頃のことども」(写真入)

美術新論 7 1 昭7・1 埴原くわ代 「罪のない失敗談」

*東京朝日新聞 昭11・9・6朝 「二科新会員七氏」——「特

待の藤川栄子さん」は「今は失明した埴原久和代女史以来女流受賞者としては初めてである」。

林真珠

金の星 6 10 大13・10 「二人の泥棒」(童話)

新居格の小説にモデルに使われたこと、もとなつた実際の出来事を林真珠自身が書いている(「歯痛」、「解放」大15・6)。新居格『月夜の喫煙』(解放社 大15・3)「プロムナード」の、親しい男性の多いモダンガール村山珠樹のモデルを指す。珠樹はシネマに関わり、「童話や詩や短篇」を書き、ある程度原稿が売れているが、何程の収入にもならない程度である。

三宅せい子

婦人公論 7 5 大11・5 岡本かの子・生田花世・中條百

合子など「奥さん達の博覧会見物」(回答)

婦人之友 22 1 昭3・1 若山牧水・鷹野つぎ・三宅せい

など「自分及び自分の家の良習慣」夫婦互に話しあふ事」(回答)

茂木由子 藤村の高瀬兼吉宛書簡に、兼吉の義妹を茂木塾の寄宿から戸板裁縫学校へ通わせることにしたとある(大10・9・24。

『藤村全集17巻』筑摩書房 昭43・11)。有島武郎と親しかった。

向上 11 2 大6・2 「令嬢方をお預かりして 茂木塾

主 茂木由子」(写真入)——女塾の規程あり。費用は月一〇円、

うち食費七円七〇銭。

幼児教育 21 8 大10・8・15 「教育について感ずることど

も 茂木女塾長 茂木由子」——16、13、9歳の男児の親として

の意見。

向上 16 6 大11・6 「百合の花」

幼児教育 22 10、11 大11・11・15 「童謡二つ みんなこい、

大きなお日様」(10、11合併号)

泉 2 7 大12・8 (有島武郎追悼の終刊号) 「歌五

首(無題)——「最後の編輯を終へて」にこの終刊号は有島武

郎と「最も個人的な親しさを持つてゐた友人のみの執筆を得」た

とある。

婦人公論 19 3 昭9・3 今井邦子・茂木女塾長茂木由子

など「娘の青春と母の座談会」

向上 36 11 昭17・11 「比叡山婦人講習会を受講して

お山の感激を語る『話』の会」(座談会、二十万の会員を持つ大

日本婦人会本部の審議員として参加。修養団が行う婦人講習会の

14 回目

横瀬多喜 紺屋の長女。旧姓、小森。二一歳年上の病詩人横瀬

夜雨と結婚した多喜は、修学旅行中に発症した盲腸炎で長女を失い(昭8)、翌年肺炎をおこした夜雨と死別、戦後(昭24)故家を去る。「常陸より地震の様子を」(『現代婦人の手紙 前出』)は藤村宛に関東大震災当時の様子を綴ったものである。多喜の「芸術解放」誌上の作品(大14又は15。所在不明のため未見)は「大分古いといへば云はれようが、農村生活のかなりしつかりした実人生をつかんだものをケレンのない筆で書いたことに異色をなす」(生田花世『近代日本婦人文芸 女流作家群像』行人社 昭4・11)と評された。病詩人を支える結婚生活と、必ずしも生活の楽ではない地主階級の視点から農村生活を描いた女性作家といえる。

婦女界 23 6 大10・6 横瀬瀧子「筑波の西より」——
以下四回は、結婚のいきさつを書いたもの。

婦女界 24 1 大10・7 横瀬瀧子「筑波の西より」

婦女界 24 3 大10・9 横瀬瀧子「筑波の西より」——

茨城新聞社「いはらき」(大6・3・11)に結婚をとりあげた社説が出たとあるが、戦災で所在不明。

婦女界 24 4 大10・10 横瀬瀧子「筑波の西より」

若草 2 6 大15・6 「稚^{きさ}なきよろこび(随筆)」——「女

性新聞」に作品掲載とあるが未確認。

若草 2 10 大15・10 「常陸の野より(手紙にかへて)」

——「ほんたうに土に親しむ気持ち」が「私らしく生くる」ことである。

若草 2 12 大15・12 川端康成・鷹野つぎ・若杉鳥子

など「樋口一葉を憶ふ」

婦人公論 12 7 昭2・7 「食卓の公開 お宅では昨夜何を

召上りましたか?」(回答)

東京朝日新聞 昭5・2・14朝 「先生におくる手紙」——常陸

の野にも資本家に対抗する氣勢が及び、小作料軽減運動が起こったこと、小作人達との心のへだたりを書く。

婦人之友 25 6 昭6・6 吉野作造・鷹野つぎ・若山喜志

子など「今後十年の予言」横瀬多喜(小説家)(回答)

婦人之友 25 7 昭6・7 「農村実話 同性を語る」——お

ちせ婆さんの話——」

婦人之友 25 8 昭6・8 「同性を語る——迷信的性生活

二題——」

婦人之友 25 10 昭6・10 「同性を語る——おとりさんを

思ふ——」

婦人之友 26 12 昭7・12 窪川稲子・鷹野つぎなど「私の

生活と子供」(写真入)

婦人之友 27 8 昭8・8 「糸子は死す」

婦人公論 19 4 昭9・4 「老病詩人に仕へて十八年」亡き

夫夜雨に送る手紙」(写真入)

婦女界 51・5 「亡き夜雨」

婦女界 51・6 「亡き夜雨（その二）」

婦人之友 28・8 「夏と田園の少女」（山崎省三画）

「夏と子供」

処女の友 19・5 「お豊を憶ふ」（随筆）

新風土 1・6 昭13・11 「田家覚え書」

新田包子

「処女地」8号「読者へ」に「静養中」とある。5号「病みて」に、悪寒に堪えつつ三月の四日間「カラマソフの兄弟」を読み続けてから体調を崩し、肋膜炎入院中のK子が描かれている。

(二)「藤村『処女地』に執筆した女性作家達(一)(二)(三)」

補遺

生田花世「西崎花世、長曾我部菊子」

『現代婦人の手紙』（前出）に「病める水野仙子さんへ（大正八年頃の手紙より）」収録。河井醉茗生誕五十年記念祝賀会による北原白秋、三木羅風、川路柳虹編『現代日本詩選』（アルス大14・11）に詩「南総にてうたへる」「晚餐」「一樹のかげ」収録。『女性作家二十二人集』（婦女界48巻5号附録 婦女界社 昭8・11）に短歌「菊の花」掲載。日夏耿之介編『明治大正新詩選（下）』（創元社 昭25・7）に詩「晚餐」「一樹のかげ」収録。

『徳島県立文学書道館文学特別展 生誕120年記念 生田花世展

「真をしたひて」（徳島県立文学書道館編 平20・8。特別展は平20・8（9）は、年譜や花世関係女性誌等を収める。同館からは、大石征也・亀本美砂「生田花世とふるさとの風土——徳島県下、ゆかりの地をたどって」（徳島県立文学書道館研究紀要 水脈「平21・3」も出ています。）

池田小菊「池田こぎく」

『関西文学』（昭47・5）に年譜を掲げた生田幸平氏による改編「池田小菊年譜」が「月刊奈良」（平2・7）に掲載されている。これに拠り、生誕地を和歌山県有田郡藤並村（現有田川町）に訂正したい。実際には明治二四年初秋の旧八月四日生まれらしい（「私が『小菊』であるわけ」、「教育文芸」大14・6）。「若草」創刊号（大14・10）に「鷹野つぎ子さんや、池田こぎくさんを生んだ『処女地』（城しづか「わかくさ」）とある。小菊は文芸色の強い「若草」や、同じ宝文館刊行の少女向き雑誌「令女界」にも感想や短篇等を発表した。（「一頁弁 奈良に居て」）「改造」大15・6に、奈良は「来世紀の女性を意味した国である」、「今の社会では、教育者はどの階級人よりも後れてゐるのださうです」とある。『増補改訂 新潮日本文学辞典』（昭63・2）、『日本現代文学大事典』（明治書院 平6・6）、『紀伊半島近代文学事典』（浦西和彦・半田美永編 和泉書院 平14・12）にも項目あり。「池田小菊展」が奈良女子大学附属図書館で開催された（平16・10（17）10。平17春には同大学記念館で「池田小菊の奈良」展）。

川島つゆ「川島つゆ子」

「隅田河岸の回顧」(『東京朝日新聞』大12・12・17)に、尋常三年の時に藤代河岸に移って来てから、震災ですべてが焦土と化すまでの河岸の回顧を綴っている。「一茶の俳句」は、教科書『女子大日本読本』(大日本図書 藤村作編 新訂版 昭12:昭13・1訂正再版)に採録、『藤村全集 別巻』(筑摩書房 昭46・5)につゆ宛の藤村書簡(大14・12・17)があり、つゆが自著を刊行の度に藤村に贈呈していたことがわかる。なお、別巻634頁の「(年不明)七月二十三日」の書簡は、川島つゆ「一茶の種々相」(春秋社 昭3・7)への礼状であるから、「昭和三年」のものである。

澤ゆき「澤ゆき子、飯野ゆき」

「お父様へ(うす日射す心)」(『現代婦人の手紙』前出)は、沼の詩を詠み続けた澤ゆきには珍しい散文である。父に愛、趣味、芸術へのあこがれを教わり、女文士になりたいという希望も許されたが、父が養子であつたために嫁さねばならなくなった、結婚が死か亡者のような心の有様であると書き、「沼が自分にある事で力づくよく思ひます」と結ぶ。ゆきの詩は、嘆きにむせびながらどこか温かさを感じさせる。その根底に、父娘の情愛があつたことがうかがえる。

正富汪洋・茅野雅子・若山喜志子編『現代婦人詩歌選集』(婦女界社 大10・5)に「春や来たりし」が収録され、汪洋「明治大正婦人詩歌小史」が「この婦人の詩に在る孤独の文字はわれ」

に強く響く」と評した。詩集『孤独の愛』(曙光詩社 大10・4)から『現代日本詩選』(前出)に「かなしき愛」、「小さいやすみ」、詩話会編『明治大正詩選』(新潮社 大14・2)に「草刈」「初夏」収録、さらに「初夏」(『明治大正詩選』)は教科書『最新女子国文』(宝文館 松村武郎編 昭2:昭3・1訂正再版)に採録。「沼の光」は『女子国文新読本』(右文書院 千田惠編 昭8・10)に採録。大貫芳江編『代表的名詩選集』(恒星堂 昭4・4)に「何時かの日の歎き」、『明治大正新詩選』(下)『(前出)に「小さいやすみ」収録。

島崎静子「加藤静子、河口玲子」

藤村の思い出についての執筆が多いが、藤村生前にも、以下の文等を発表した。

婦人之友	24 7	昭 5・7	「七月の献立」
婦人公論	21 10	昭11・10	「南米紀行 印度洋にて 藤村氏夫人島崎しづ子」——航海中、嶋中雄作宛の書簡形式 写真入
婦人公論	22 2	昭12・2	「南米より紐育へ」——同形式 写真入
婦人之友	31 4	昭12・4	「新しい家に住みて」(写真入)
婦人之友	32 5	昭13・5	「春の花鳥譜 柳の花」——静養中の主人に代わって花のおたより。
「巡礼」の筆者に代りて	19 14	昭12・12	「改造」といった藤村の代筆もある。瀬沼茂樹「献身的に藤村に尽す 島崎静子夫人のこと」(『朝日新聞』昭48・5・17夕)には、藤村遺品の日

本近代文学館への寄贈のこと等が書かれている。

鷹野つぎ「岸次子、岸つぎ子」

生田花世『近代日本婦人文芸 女流作家群像』（前出）に宇野千代子夫人と対照的に、「鷹野つぎ夫人の作品は世評、地味だ寂しいと云はれている」、大部分の女が「まさに代弁してもらへてゐる気がするらしいさういふところにこの人の立場もありつよみもある」とある。「子供達へ」（「処女地」1号「帰省した子供達へ」改題。前出『現代婦人の手紙 収録と同じ部分』は教科書『最新女子国文』（宝文館 松村武雄編 昭2・昭3・1訂正再版）に、「旅の面白味」（『週刊朝日』）は『女子国文新読本』（右文書院 千田憲編 昭8・10）に採録、『女流作家二十一人集』（前出）に小説「沈黙」掲載、『増補改訂 新潮日本文学辞典』（前出）にも項目あり。

辻村乙未「正宗乙未」

「処女地」以前、「文章世界」（大2・7）に短歌を投稿した他、「詩歌」の5・11・5・5（大4・1・5）にも各七一一〇首の短歌を発表していた。「詩歌」には創刊号からしばらく兄の正宗得三郎が表紙を書いている。「恵まれたる優生遺伝の十八名家」辻村乙未夫人談（「婦人之友」大11・3）に兄妹の生い立ちが語られている。「処女地」後、「婦人サロン」や「若草」にも執筆。「漁村から」（「処女地」1号「漁村にて」改題）は教科書『現代女子

国語読本』（東京開成館 八波則吉編 大13・昭4・1訂正四版）に採録。

若杉鳥子「板倉鳥子、若杉とり子、若杉はま子、若杉小夜子」

「少女と室壺」（「解放」大15・6）は、同誌「編輯前記」に「作者若杉鳥子さんは最近世に現はれて最も未来を囑望されてゐる新進作家」とあり、オールド・ボーイ「モダン・ガールの陳列 雑誌六月号を読んで【四】」（『東京朝日新聞』大15・6・4）に「霸気縦横」、「このモダン・ガールの自負を見よ」と評された。鳥子と親しかった生田花世は、現世に対して不満と反抗を所有する性格がプロレタリア的である、ブルジョア生活をすればするほど一層憂鬱になり、叛逆的になる、と評した（『近代日本婦人文芸 女流作家群像』前出）。小林裕子「若杉鳥子 階級格差の発見から男女格差の発見へ」（『国文学 解釈と教材の研究』平21・1）がある。

若山喜志子「太田喜志子、黄紫女、はるき木」

『現代婦人の手紙』（前出）に「奈良に居る画家の方に」（竹添履信宛）収録。「小鳥、水蟹」は教科書『日本女子読本』（富山房 高木武 昭7・11、昭7改正再版）に、「時雨雲」は『女子皇国新読本』（帝国書院 山岸徳平・岩田九郎編 昭12・5）に、「あまつたふ日」は『新修国文 女学校用』（富山房 富山房編輯部編 昭12・6）に、「遠つあふみ」は『新女子国文』（至文

堂 久松潜一編 昭12・6)に採録。『女流作家二十二人集』(前出)に短歌「深山路の栗鼠」掲載。『増補改訂 新潮日本文学辞典』(前出)にも項目あり。

二、素川絹子「加藤きぬ子、猪俣絹子」

素川(加藤)絹子は、原稿依頼や督促等、「処女地」の編集実務を担当した。絹子は「きぬ」の署名で「赤彦童謡集——島木赤彦著」(3号「書架」欄)、「霧——喜多村進著 創作」(9号「新刊書」欄)を執筆したが作品を掲載しておらず、終刊号「附録 本誌執筆者別総目録」に名前はない。絹子が後に編集長となる「女人芸術」には多くの「処女地」同人が執筆しており、雑誌「処女地」のゆくえを考える上で重要な人物なので、見ておきたい。

明治三六「一九〇三」年四月、愛知県鳳来寺(現新城市)生まれ。父は雑貨商。旧姓加藤、本名猪俣絹子。若山牧水に師事し、若山家に寄寓したこともあり、喜志子と親しかった。大正一一年頃、藤村の家に寄寓、「処女地」の編集助手を兼ねて、藤村の生活を助けていた。大正一三年、藤村の紹介で新潮社に入社、雑誌「婦人の国」(創刊号に藤村は「明日」を寄せた。編集人は松田鶴子。大14・5・大15・5)の編集者となった。編集後記「グリンルーム」には、通話中のアノウの多さをからかわれて「アノウ私そんなにアノウなんてはいはないわ(素川)(大14・10)等とあり、競争で全国の愛読者を訪問する企画の際には、九人の記者(うち三人が女性)の一人として洋装写真入りで紹介された(大15・

4)。小説、貧民窟の記事等、雑多な誌面の手芸欄に署名入りの作り方を書いている。女性記者の使われ方がうかがえる。「婦人の国」は突然廃刊したため、絹子は、同じ新潮社の「文章倶楽部」の手伝いをし、「お仕事と藤村先生」を執筆した(「作家の仕事振り」特集、大15・8。「藤村研究風雪4」昭41・11に収録)。藤村が若い人達に「折りにふれて心づいたことなど」を書き付けるノートを作ることをすすめていたこと等が書かれている。この頃、原稿の用事で三上於菟吉、長谷川時雨の家を訪問したのがきっかけで、「女人芸術」(昭3・7創刊)に参加した。「時雨女史を中心に、妹さんの画家春子女史が絵画方面、女流方面に顔の広がった生田花世女史が一般渉外にあたり、私が編集事務を分担の形で発足しました」(尾形明子氏宛書簡)。絹子は毎号編集後記等を書いて活躍したが、三卷十一号「編集後記」(昭5・11)に、今月は「病気で完全にお手伝ひが出来なかつた」病気が回復した後は雑誌の為に努力したい、とある。「回復の後はそのまま地下運動へと入っていった」(尾形明子「聞き書『女人芸術』の人びと」83 素川絹子、「図書新聞」昭56・5・16。「婦人の国」以前については「加藤きぬ子」『島崎藤村事典』明治書院、昭47・10参照)。「真面目に生きることを思う若いインテリゲンチヤの、それはごく自然な道ゆきだった」(尾形明子「女人芸術の世界」ドメス出版、昭55・10)。

「女人芸術」掲載の「反動希望社」一覧、「希望社の反動事業網」は、「反動希望社」一覧」の題で『日本プロレタリア文学集』34 ル

ポルターージュ集(二) (新日本出版社 昭63・10)に収録。「処女地」や編集後記の他に執筆等が確認できたのは、以下のものである。

婦人の国 1・1 大14・5 素川きぬ子「便利で感じのいいブック・カヴァ」

婦人の国 1・6 大14・10 素川きぬ「上品なレース編みの屑入れ」

*東京朝日新聞 大14・12・13朝「婦人班の打合せ」——同情週間の婦人記者班として「婦人の国」から参加。

東京朝日新聞 大14・12・28朝「同情週間 配給第二日 D班 真心を歌にこめて 三河島浄化園に起る賛美歌『婦人の国』素川絹子」

婦人の国 2・2 大15・2 素川きぬ子「ハンカチや皿敷に応用される刺繍の仕方」

婦人の国 2・3 大15・3 素川きぬ子「丈夫で美しい通学用の鞆と草履袋」

婦人の国 2・5 大15・5 「初夏にふさはしき爽やかな手提」

文章倶楽部 11・8 大15・8 素川きぬ子「お仕事と藤村先生」

女人芸術 1・3 昭3・9 生田花世・大井さち子など「多方面恋愛座談会」

サンデー毎日 8・9 昭4・2 「〈女性会議をわらふ〉興行物の感じ」

女人芸術 2・2 昭4・2 平塚らいてう・奥むめおなど

「誌上議壇 消費組合運動など」

女人芸術 2・3 昭4・3 「時代の泡沫」

女人芸術 2・5 昭4・5 「波浮の人々」表紙のない日記帳より」、林芙美子・生田花世など「講演会報告」

女人芸術 2・6 昭4・6 平塚らいてう・生田花世など「女人芸術一年間批判会」林芙美子・今井邦子など「(生田花世)燃ゆる頭合評」

詩神 5・6 昭4・6 「紅い蔦の芽(古い手帳より)」

詩神 6・1 昭5・1 (現代女性詩人研究号)「〈私の初恋〉叱られた泥こね」、「私のすきな男性!」男と女の見栄坊」

女人芸術 3・2 昭5・2 新居格・尾崎翠など「爐辺雑話」

女人芸術 3・7 昭5・7 「反動希望社一覽」

女人芸術 3・8 昭5・8 「希望社の反動事業網」

*読売新聞 昭6・3・4朝 「女人芸術社同人留置取調べらる 全協のレボとして暗躍 藤村氏の弟子だった素川嬢」

*東京朝日新聞 昭6・3・4朝 「女人芸術同人検挙さる 素川絹子」

——関東金属労働組合に加盟し全協系レポーターとして活躍していることを探知し、警視庁官房特高課が同潤会大塚女子独身アパートに踏み込み引致、取調べ中。

三、「処女地」 創刊時の執筆者の年齢、未婚既婚の別、学歴

創刊時の満年齢・未婚既婚の別（文学事典に項目のある二名はゴシック体。傍線は既婚者。波線は在学中。）

42歳 埴原久和代（死別。独身）／41歳 三宅せい子
 38歳 織田やす子 ／37歳 茂木由子（死別。子三人あり）
 33歳 若山喜志子、加藤みどり（大11・5病没、遺稿掲載）、生田花世 ／32歳 藤田はづ、伊東英子 ／31歳 鷹野つぎ ／30歳 三木栄子、川島つゆ、池田こぎく
 29歳 細川武子、若杉鳥子 ／28歳 澤ゆき ／26歳 長坂きくじ、辻村乙未 ／25歳 島崎静子
 23歳 横瀬多喜、星野耀子 ／22歳 新田包子、浦野蕉子、本多はる子 ／21歳 今井喜美子、横瀬紀美恵、田尻稲子、砂原芳子（21歳で大7・4没、遺稿掲載）／20歳 河井稲子、本多たけ、高橋元子 19歳 渥美延子、上野小枝、林真珠、小堀敬子 ／18歳 金澤やす子、上田杉子、奥村みさを／17歳 大井さち子（中原つる子、野村千代、藤田茂都子、水上げさを、は生年不明）
 生年の判明している三九人中一六人が既婚者（死別含む）、そのうちおそらく澤ゆき、長坂きくじ、横瀬多喜の三名が舅姑と同居、三木栄子と澤ゆきは商家の主婦であった。つまり、約四割が既婚者、そのうちの約八割は核家族であった。若山秋水（若山喜志子）、生田春月（生田花世）、加藤朝鳥（加藤みどり）といった文学者、地理学者辻村太郎（辻村乙未）、新聞記者鷹野弥三郎（鷹

野つぎ）等、文筆に携わる夫の多いことも特徴として挙げられる。在学中と判明している者も三人いる。

学歴

【・東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）——織田やす子（米オペリン大学・大学院留学）、高橋元子（在学中。帝大聴講生）、新田包子（在学中）
 ・日本女子大学——浦野蕉子、星野耀子／女子英学塾（現津田塾大学）——島崎静子（中退）、辻村乙未
 ・女子師範学校——長坂きくじ（松本）／細川武子（第二部。東京府。現東京学芸大学）／池田小菊（和歌山）／砂原芳子・東京女子美術学校西洋画科——埴原久和代／県立静岡高女研究科——鷹野つぎ（中退）／県立徳島高女補習科——生田花世／お茶の水高女専攻科——上野小枝（在学中）／技芸学校（現共立女子大学）——澤ゆき
 ・お茶の水高女——茂木由子／横須賀の高女——田尻稲子／日本女子大学附属女学校——河井稲子／東京三輪田高女——川島つゆ／堂島女学校——三木栄子／女学校——伊東英子
 ・高等小学校のあと農閑期の広丘農工補習学校（ここで裁縫教師になる）——若山喜志子／尋常小学校高等科卒——加藤みどり／尋常小学校卒業後は芸妓の修行——若杉鳥子

尋常小学校は明治四〇年に四年から六年に年限延長が定められ

た（同年の女子の就学率九六パーセント）。当時の修業年限は原則以外に認められたものもあるのだよそであるが、尋常小学校に続いて高等小学校へ行く場合は二年（三、四年）、高等女学校（女学校、高女ともいう）へ行く場合は四年（五年）である。高等女学校終了後に専攻科や補習科も設けられていた。師範学校は第一部は高等小学校卒業後四年、第二部は高等女学校卒業後一、二年であるから、高等女学校を卒業するより修業年数は長い。日本女子大学や女子英学塾等の専門学校は高等女学校卒業以上を入学資格として修業年限三年以上、女子高等師範学校は師範学校二年終了を入学資格として修業年限四年。当時は東京と奈良にある高等師範学校、若干の専門学校が女子の最高の教育機関であった。明治三八年には五パーセントにも満たなかった高等女学校への進学率は、大正九年には九パーセントとなる一方、「高等女学校を卒業した後さらに進学する女子高等師範学校や女子専門学校も明治末から大正にかけて創設されていったが、実際にこれらの高等教育機関に進学したのは、戦前期を通して一パーセントに満たないものであった」（稲垣恭子『女学校と女学生』中央公論新社 平19・2）。「処女地」執筆中で学歴が判明している「五人のうちの【一】内の一六名、つまり六割強が高等女学校卒業よりも修業年数の長い人達であるから、いかに高学歴の女性達が集まったかがわかる。もちろん、地域や時代の差や個人的事情もある。たとえば、明治二年生まれの三人の女性のうち、若山喜志子は「私の少女時代はまだ／＼女の子に学問は不必要」という時代で、どんなに頼

んでも学校の先生がすすめて来てくださっても女学校に入れなかった、「私より九ツ年下の妹（潮みどり：論者注）などは、少女として十三、四に育つたころは母の健康もよくなつてあたり年代的にも中等教育を受けさせるのは普通位に世の中がなつてゐたりして、立派に女学校を出して貰へた」（村岡花子編『わが少女の日』⁽⁹⁾ 甲鳥書林 昭17・6）。同じ長野県出身の加藤みどりも弟妹は上京して修学している。徳島の生田花世は血書を書いて高等女学校進学を父に許された。六（五）歳下の澤ゆき（茨城県）は「村には当時四年制の尋常小学校しかなく、小学校を出ると親類を頼って上京し、高等小学校で四年間、技芸学校で三年間を東京で過ごし、当時の農村女性としては異例の学校生活を送った」（故郷の沼をうたい60年 女流詩人沢ゆきさん、「朝日新聞」昭42・1・24朝）。女中との子として生まれ芸者置屋の養女となった若杉鳥子は、小学校しか出ていない者が物を書く苦勞を書き続けた。学びたい女性達であつたことは確かである。

結び

「処女地」に集まった女性達は、およそ三通りの参加形態をとつた。第一は、藤村が「これまでも私のところへよくやって来てゐた河口玲子、浦野蕉子、鷹野つぎ、辻村乙未」に相談すると、皆さんも大変乗気になつて「四人の人がそれからそれへと同好の士を集めて来た」（『処女地』にあつまる若き婦人、「サンデー毎日」大11・7・16 前出全集別巻所収）と話しているものである。星

野耀子は同じく日本女子大学の浦野蕉子に誘われたであろう。若山喜志子には「女子文壇」で共に活躍した鷹野つぎからの誘いの手紙への返事がある。誌友に誘われて途中から誌友になった人もある。第二には、田尻稲子、河井醉茗の娘稲子、横瀬夜雨の妻多喜子、三宅克己の妻せい子、伊東英子といった、発行者藤村が集めた同人である。埴原久和代、茂木由子もここに含まれるであろう。そして第三に、生田花世のように「巻頭にある同人も寄稿家と同じやうにといふ寛大な規則的でない言葉を見ましたものですから、家事のいとまぐに残した抒情詩を寄稿いたします」(2号「おとづれ」欄)という参加のしかたである。

こうして集まったのは、創刊当時満一七歳から四二歳の女性で、約四割が既婚、そのうちの八割は核家族であった。また、一割は在学中であり、高等女学校卒よりも在学年数の長い、当時としては特別に高学歴の女性が、六割もいる。そうでない女性達も進学の希望の強かったことを書いている。学びたいという希望が強かっただけでなく、文芸への志望や自分を伸ばしたいという思いを断たれるであろう結婚生活への猶予期間を延ばすという意味合いの強かったことも、「処女地」の作品からは読みとれる。

補遺作成によって明らかになった、教科書への「処女地」作品の掲載や、一七歳の大井さち子の詩が「処女地」刊行中から「東京朝日新聞」に掲載されていること等からは、「処女地」が相当の評価を受けていたことがわかる。⁽¹⁾

「処女地」によって女性達は変化した。「処女地」以後に作品

を発表したと言える女性達も多くはその前に投書等をしていて。

投書雑誌「文章世界」には辻村(正宗)乙未(大2・7)、河井稲子(大8・11、大9・11)、野村千代(大9・11)が投稿し、「詩歌」には乙未(大4・1・5)が作品を掲載していた。これらはいずれも短歌、俳句、詩であることが特徴的である。千代は「処女地」に小説等を発表し、「処女地」以降、乙未、稲子は小説を書き始めた。「処女地」以前に「女子文壇」で活躍した若杉鳥子も、主に短歌を「新潮」などに発表していたが、「処女地」(3号)や『現代婦人の手紙』(前出)に手紙形式の作品を発表したことを契機としたように小説を書き始め、プロレタリア新進作家として認められた。横瀬多喜は「婦女界」(大10・6・10)に、読者を念頭におかない断想のような文章を綴っていたが、「処女地」に相手を想定した消息を書き続けることによって、小説を書くようになった。これらを見れば、「処女地」の手紙形式や、心づいたことを書きつけるノート作成のすめといった藤村の指導は、女性達が小説を書く上で殊に効果的であったといえよう。

横瀬多喜は、「あなたは野に住む人であるから、それを書くことになさい。野と山のもつ素朴、くそと真実とを忘れてはいけない」と藤村に言われ、「先生におくる手紙」(東京朝日新聞、昭5・2・14朝)、農村生活を描く作家となる。「島崎先生」に宛てた多喜の手紙(常陸より地震の様子を「現代婦人の手紙」前出)には、「処女地」へおあつまりの皆さまは、どんなにお暮で御座いますか。あの心の生々としたたのしい日をおもひ出すと恋くなります」、

「あの『思ひ出』の書きものもそのまゝになつて、いつ頃お目に懸けられるのか見当もつきません」とある。「処女地」後も原稿のやり取りがあったことがうかがえる。詩作を続けた田尻稲子も「私の発足は先生のお宅からであつた」（『飯倉の先生』、「女性時代」昭18・10）と書いている。「処女地」発行中はもちろん、「処女地」後も女性達にとつて、「処女地」や藤村の教えは支えになつていたことがうかがえる。

「処女地」は、結婚生活に入るよりも学ぼうとし、結婚後も書こうとした女性達に、発表と成長の場を与えることによつて、そのうちかなりの女性達が書き続けることに寄与したのである。

〔注〕

- (1) 発行者藤村は僅かに執筆している。女性のみが執筆する雑誌は珍しく「処女地」の他に「女人芸術」がある。
- (2) 「内外持論 同盟罷工とサボタージュ研究号」の創作欄に佐藤春夫「陥穽と振子」等と共に掲載（『東京朝日新聞』大8・11・2広告による）。

- (3) 〈 〉内は、欄名や特集の題
- (4) 教科書採録については、田坂文穂『旧制中等教育 国語教科書内容索引』（教科書研究センター 昭59・2）をもとに調査した。教科書本文には異同がある。
- (5) 写真版、コロタイプ版等があるが、すべて「画」と記した。

- (6) 徳島県立文学書道館事業課主任亀本美砂氏の御教示による。

- (7) 生田幸平氏の御教示による。

- (8) ただし、「日本には女子高等師範学校が二つしか無い。其外に専門学校が若干あるが、何れも男子の専門学校と比べて遙に程度が低い。私立として女子大学が二つあるが、名称は大学でも実は高等学校に達しない」（内田魯庵「日本の新しい女」、「解放」大12・1）等と書かれていた。

- (9) 生田花世、平塚らいてう、上村松園等が執筆している。

- (10) 「十一月号に創作を出した川島つゆ子は最近にわたしたちが迎へた姉妹の一人です。伊東英子、三宅せい子の二人は発行者の旧知であり、上田杉子は上野小枝の友達であり、その他にも七月このかた本誌に迎へた姉妹はすくなくありません」（「処女地」8号「読者へ」）等とある。

- (11) 拙論「藤村が発行した『処女地』の位置——女性が書く意味——」（『叙説』平23・3）で「処女地」の世評等に言及した。

〔附記〕本論は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。